

## 必修領域「教育の最新事情 1」

児童生徒・学校教育をめぐる諸課題を解決するには、児童生徒に寄り添いながら当事者である児童生徒・保護者・地域との連携の上に立った教職員集団の専門的な日常実践が不可欠である。本講習では、日本の公教育に従事する教員の卓越性である同僚性・協働性を更に深めるべく、主に「教育施策」「教員としての子供観、教育観」「子供の発達」「子供の生活の変化」の四つの事項について、反省的实践家としての教員の資質の向上を目指す。

(※下記講座の内容及び講座名等は変更する場合があります。)

### 1 国の教育施策と海外の教育の動向

教育学部 教授 杉山 浩之

グローバル化、AI（人工知能）の発達など劇的に変化する社会の中で、子供たちの成長にとって必要とされる「主体的・対話的で深い学び」「教科を横断する学び」などへと教育内容・方法は変わろうとしている。教育政策が修正され、学習指導要領が改訂されるのは現在の教育ニーズの変容や未来社会の変化への対応のためであるが、教育現場では改革や改訂を待たずに子供の実態や社会の変化に対応して進めている面もあるであろう。「アクティブラーニング」という用語は広く普及したが公式には使用されないようである。これは従来から行われてきた教育方法でもあった。今後、学校教育は様々な変化を求められてくるが、海外の動向も交え、日本の教育はどう変わろうとしているのか、教育の専門家として如何なる哲学を持ち、どのような専門的知識・技能が求められるのかを考えていきたい。

### 2 教師—子ども関係の省察

教育学部 准教授 田中 崇教

—「わたし」は<教育>という視点に基づき、子どもたちとどのようにつながったり、向き合ったりしてきたのだろうか—ちょっと立ち止まってこれまでの経験を振り返り、自らの子供観や教育観を考えるトレーニングが本講の主題である。今までがそうであったように、概して、こうした類の講習会に参加した「わたし」は、終わった後に何らか

の意義を見出すだろう。だが、それは狭隘な<sup>きょうあい</sup>解釈に陥っていないだろうか。新たな可能性の芽を摘みとっているのではないだろうか。詳しく言えば、これまでに構築してきた「わたし」の認識枠組みを基準とし、その枠組みの中に「収まる/収まらない」で判別していることに無自覚になっていないだろうか。

そこで、従来の認識枠組みを「わたし」自身でゆさぶり、問い直すアクティブな活動を本講は目論んでいる。その題材としての子供観や教育観であり、教育的愛情や倫理観、遵法精神などをキーワードにその本質に迫っていききたい。

### 3 子どもの発達と学習

教育学部 准教授 新見直子

グローバル化の進展や産業・就業構造の流動化などに伴い、教育の在り方にも転換の必要性が指摘されている。つまり、知識伝達型の授業による知識獲得を行う受動的な学習から、自ら課題を発見し、仲間と協働しながら問題解決を行う能動的な学習への転換が求められている。そして、このような能動的な学習の促進によって、意欲的にねばり強く学び、他者と相互作用しながら学びを発展させ、さらに既有知識等を自らの課題解決に活用する力の育成が今後の教育における重要課題とされている。そこで本講では、子供たちの学習意欲・動機づけや学習に関連する自己概念等の発達及びその関連要因について最近の研究知見を概説し、教育への応用を考えていくことをねらいとする。

### 4 特別支援教育の視点からの児童生徒理解と支援のあり方

人間科学部 教授 李木明德

現在、児童生徒について考えるとき多様性という言葉が必ず出てくる。児童生徒の多様性を理解する視点の一つとして、特別支援教育の視点がある。診断のあるなしに関わらず、児童生徒の発する言葉や行動から何らかの気がかりさを感じる時、一度は特別支援教育の視点から客観的な理解を行い、それに沿った支援を試みるのが大切である。本講では、学校生活のなかで児童生徒が発する言葉や行動を具体的に取り上げ、教師に求められる理解と支援のあり方について合理的配慮、ユニバーサルデザインという視点から考察していく。

## 5 教育現場におけるカウンセリングマインド

教育学部 准教授 牧 亮 太

児童生徒が抱える「心の問題」が多様化・複雑化する中、教師には個別への対応がますます求められるようになってきている。しかし自分の「心の問題」を整理し、言葉で表現するのは、私たち大人にとっても簡単なことではない。ましてや心も身体も成長途上の児童生徒にとって、自分の思っていることや自分の気持ちを他者に伝えることは想像以上に難しいことであろう。

本来、自分の気持ちを伝えることは親子や友達との関係の中で育まれるはずである。しかし、少子化や近年の子供たちの多忙化によって、子供たちどうして自分の気持ちを丁寧に伝え合う機会そのものが失われてきている。また、少子化により子供一人ひとりに向けられる親からの期待が高まる中、「元気で明るいいい子」を演じるがために自分のありのままの気持ち、特に負の感情を表現できない子供たちが増えてきていることも指摘されている。

このような今日的課題に対し、有効と思われるのがカウンセリングマインドである。そこで本講座では、カウンセリングマインドとはどのようなものなのか、なぜ今、教師にカウンセリングマインドが求められるのかについて説明し、教育現場におけるカウンセリングマインドの活かし方について考えていくことをねらいとする。

### 選択必修領域「教育の最新事情2」

児童生徒・学校教育をめぐる諸課題を解決するには、児童生徒に寄り添いながら当事者である児童生徒・保護者・地域との連携の上に立った教職員集団の専門的な日常の実践が不可欠である。本講習では、日本の公教育に従事する教員の同僚性・協働性をさらに深めるべく、主に「新学習指導要領」「組織的対応」の二つの事項について、反省的実践家としての教員の資質の向上を目指す。

(※下記講座の内容及び講座名等は変更する場合があります。)

# 1 様々な問題に対する組織的対応の必要性

人間科学部 教授 菅井直也

学校は組織的・計画的に教育を展開する機関なのだから、授業のみならず、直面する問題への対応は、当然、組織的になされている——でしょうか？

学校や社会をめぐる近年の状況を踏まえれば、保護者や地域社会との連携、児童生徒との対人関係にも、組織的対応は不可欠なのですが、現実はどうなのでしょう。

今回はかかる認識のもと、組織的対応の前提となるスキルを確かめながら、あらためて学校の前提を見直す体験をしてみましょう。

ロールプレイなどの実習場面も用意します。長年鍛えてきた（筈の）筋肉を、一度ストレッチして解きほぐし、元気を取り戻す手がかりをつかみましょう。

# 2 学習指導要領の改訂動向

教育学部 准教授 白石崇人

平成 29(2017)年 3 月、幼稚園教育要領および小・中学校学習指導要領、特別支援学校学習指導要領等が改訂された。翌平成 30(2018)年 3 月には、高等学校学習指導要領も改訂された。これらは、平成 30 年 4 月に幼稚園、平成 32(2020)年 4 月に小学校、平成 33(2021)年 4 月に中学校、平成 34(2022)年 4 月に高等学校で完全実施される（特別支援学校は学校種に応じた時期に完全実施）。また、総則と第 3 章（特別の教科・道徳）については、平成 30(2018)年 4 月に小学校、平成 31(2019)年に中学校で実施される。2022 年度までの数年間は、まったなしに、新学習指導要領等を実施していかなければならない時期である。

新学習指導要領等の理念やキーワードなどは、この数年間で様々な媒体に取り上げられており、受講者にとっては既知の範囲であろう。本講では、新学習指導要領等の概要を整理した後、各講習者の興味関心に基づいて、アクティブラーニング方式で学修指導要領等に関する学修を進めていく。具体的には、「主体的・対話的で深い学び」の観点から、指導要領等における各教科・領域の目標・内容等について、講習者が協働して主体的に分析し、その結果を自分たちなりにまとめて発表して教え合う活動を行う。

※当日は、学習指導要領解説（教科・学校種は任意）または幼稚園教育要領解説を持参してください。

## 選択領域（小学校コース ー国語・書写・算数・図画工作・社会・理科）

### 新学習指導要領と小学校教育の充実

本コースでは、新学習指導要領の趣旨に沿った国語科，国語科書写，算数科，図画工作科，社会科，理科の指導法について解説し，実践演習を行う。これらの講座を通して，小学校教員としての資質の向上を目指す。

（※下記講座の内容及び講座名等は変更する場合があります。）

#### 1 単元を貫く言語活動を考える

教育学部 教授 岡 利 道

すでに文部科学省編「初等教育資料」では，平成24年4月号・平成25年5月号において，次のような特集が組まれていました。

○単元を貫く言語活動をどう位置付けるか ～授業改善へのチャレンジ～

↓

○単元を貫く言語活動を位置付けた国語科の授業づくり～そのさらなる推進へ向けて～

文字どおり，単元を貫く言語活動へ果敢に挑戦する段階から，より一層の推進を図る段階へと，小学校の教育現場は向かっているのです。

ここでは，こうした動向を押さえつつ，学習者の興味関心を刺激し，より一層の推進をめざしていく方向性を探ることにします。ここでは，「伝統的な言語文化」の言語活動にスポットを当て，『竹取物語』の本文を教材化して考えていこうと思います。

#### 2 国語科書写の学習指導と実技

教育学部 教授 森 哲 之

本講座では，小学校学習指導要領における国語科書写に関する指導法を理解し，毛筆書写実技による演習を通して，書写の指導技術や書写技能を高めることをねらいとする。

毛筆を使用する書写の指導は、硬筆による書写の能力の基礎を養うよう指導することになっている。そこで、毛筆書写における筆圧や用筆などに着目し、毛筆書写と硬筆書写とを関連づける効果的な指導法について検討する。また、児童が文字を正しく丁寧に整えて書き、書写を日常生活や学習活動に生かしていくためには、児童の実態に即した授業展開や指導の工夫が必要となる。新たな知見を取り上げながら、学校現場における授業実践上の課題に応えることによって、書写の学習指導の充実を図る。加えて、書道文化や文字文化についても触れていく。

準備物として、毛筆書写に必要な用具用材一式（児童が書写で準備するもの）を持参ください。（硯、文鎮は備え付けのものあり。）

### 3 新学習指導要領が目指す算数科の授業

教育学部 教授 今崎 浩

本講座では、平成29年告示小学校学習指導要領に示された算数科の目標をどのように捉えたらよいか、例えば「数学的な見方・考え方」や「数学的活動」とは何か、又それらは実際の授業場面において、どのような児童の姿として表出するのか等を考えることを通して、新学習指導要領が目指す算数科の授業像を明らかにしていく。

本講座を通して、受講者一人一人が自らの算数科の授業を振り返り、今後どのように改善・充実を図っていけばよいか、自分なりの解を見つけることができるような機会としていきたい。

### 4 図画工作科における鑑賞指導の充実を目指して

教育学部 教授 佐伯 育郎

現在、小学校図画工作科や中学校美術科など、美術教育における鑑賞指導の充実が求められており、様々な実践や研究が行われている。従来、学校現場では、表現を重視するあまり、鑑賞がおろそかにされてきた状況があった。表現の授業に比べると、鑑賞の授業では児童・生徒も受動的になりがちであった。ある調査によると、指導をする教師自身も、美術鑑賞には余り親しんでいない状況も見られた。

本講座では、小学校図画工作科の内容について再確認するとともに、鑑賞指導に焦点を当てて、その実践例を体験していただく。具体的には、次の実践例を考えている。

- ① 1点の作品をじっくり見る
- ② 複数の作品を比較して見る

講義では、美的鑑賞と知的鑑賞との違いなど、美術鑑賞の分類について取り上げるとともに、演習ではアートゲームも体験していただく予定である。美術鑑賞とその指導に興味・関心を持っていただき、図画工作科における鑑賞指導のヒントとして、実際の授業に少しでも活かしていただければと考えている。

## 5 社会的な見方・考え方を働かせ、公民としての資質・能力の基礎を育成する授業

教育学部 教授 村上典章

平成 29 年 3 月に新しい学習指導要領が告示された。それによれば、小学校社会科では、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を育成することを目標とする。そして、その資質・能力の具体的な内容は「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱で示される。

また、「社会的な見方・考え方（各学年の目標では「社会的事象の見方・考え方）」の性格を次の二点のように明確化した。

一点目は、「社会的な見方・考え方」は、課題を追究したり解決したりする活動において、社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を考えたり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断したりする際の「視点や方法（考え方）」であると考えられる。

二点目は、「社会的見方・考え方」は、思考力、判断力を育成することはもとより、知識と知識を関連付けて深く理解すること、主体的に学習に取り組む態度にも作用することが考えられるため、資質・能力全体に関わるものであると考えられる。

そこで、本講では、講義と演習を通して、小学校社会科の改訂学習指導要領に触れるとともに、「社会的な見方・考え方を働かせ、公民としての資質・能力の基礎を育成する授業」づくりについて考える場を提供したい。

## 6 主体的・対話的で深い学びを目指す理科授業のあり方

教育学部 准教授 三 田 幸 司

新学習指導要領における改訂の大きな方向性としては、知識・理解から資質・能力へのシフトや、深い理解のための見方・考え方の育成などが挙げられます。また、平成 27 年度全国学力・学習状況調査において行われた理科の調査結果では、「観察、実験の結果を整理し、考察して、分析したことを記述すること」「実験の結果を見通して実験を構想したり、実験結果を基に自分の考えを改善したりすること」等に課題が見られることから、問題解決への見通しをもつことができるように理科授業を改善・充実させることが求められます。

これらのことから、本講座は、講義（主体的・対話的で深い学びを目指す小学校理科授業の在り方、指導改善のポイント）と演習（観察・実験等）を通して、今後の理科授業の指導法について考えていただくことをねらいとします。

### 選択領域（中学校・高等学校 国語科コース）

#### 国語科内容学の充実に向けて

中学校・高等学校国語科コースでは、国語科で取り扱う内容について、より深い理解と認識を得るために、日本語学の領域から「言語文化を通して豊かな言語生活を考える」、日本文学の領域から「『枕草子』を拓く」並びに「古典指導を考える」そして漢文学の領域から「漢文の理解について及び日本人と漢詩について」と題してそれぞれ講習を行う。

（※下記講座の内容及び講座名等は変更する場合があります。）

#### 1 言語文化を通して豊かな言語生活を考える

教育学部 教授 橋 村 勝 明  
教育学部 教授 黒 木 晶 子

中学校・高等学校国語科コースでは、国語科で取り扱う内容について、より深い理解と知識を得るために、日本語学の領域から「言語文化を通して豊かな言語生活を考える」と題して講習を行う。

従来「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」とされていた内容が、「知識及び技能」に改められた。「知識及び技能」に記されている三つの事項を指導するためには、私たちが日常使用していることばに改めて目を向け、「豊かな言語生活」に繋げていく必要がある。その階梯として、言語事項に相当すると考えられる、日本語学における文字・表記、音声・音韻、文法の各領域を取り上げ、講義を展開していく。

## 2 『枕草子』を拓く

教育学部 准教授 猪川 優子

平安時代に清少納言によって著された『枕草子』は、今日、中学校・高等学校国語科の定番古典教材として位置付けられる作品である。作者の観察眼や表現力は千年の時を超えてなお、読む者に新たな知見を施し、多くの共鳴を促す。

本講習では、先学の研究成果をもとに『枕草子』を再考し、文学教材・古典教材としての新たな可能性を模索することを目的とする。まず、伝本系統、作者、作品世界の内実などを分析・読解し、読む力を高める。ここでは単に古典作品として捉えるのではなく、文学の普遍性や特異性の中で『枕草子』を捉えていく読み方を養いたい。その上で、『枕草子』が生徒にとって「主体的・対話的で深い学び」の教材となり得るのかを探っていく。生徒が自分自身の問題として作品を捉えるために、教授者はどのように『枕草子』を拓けばよいのか、本講習を通して考えていきたい。

## 3 漢文の理解について及び日本人と漢詩について

人間科学部 教授 宮崎 洋一  
人間科学部 教授 豊後 宏記

日本で一般に漢文と呼ばれている作品は、前近代の中国で書かれた散文や韻文の総称である。前近代の日本人は、漢文を日本語の音と語順に従って読む「書き下し」と呼ばれる方法をあみだし、中国の書籍から多くの考え方を学んで、自国の文化の

発展に役立ててきた。そして、この「書き下し」によって、漢文は日本の作品であるかのように定着してきている。

その一方で「書き下し」は、韻文に対する理解には、多くの問題を残すことになった。また、様々な要因によって、日本人が多く読む漢文は、一部の時代や領域のものに偏っている。

この講義では、現在、用いられている中学校や高等学校の国語の教科書で扱う漢文の持つ特徴と限界を通して、前近代の日本人の中国への理解の一端を探り、現在使用されている教科書の漢文教材への理解を深めると共に、現代の日本の文学や言葉における、漢文とその基礎となる漢字の重要性について考える。また、国語教科書に採録されている日本人の漢詩作品を取り上げ、日本人が漢詩を作ることの意味について考える。

## 4 古典指導を考える

教育学部 教授 岡 利 道

ある調査によれば、古典の授業が本格的に始まる中学1年生の段階で、「古典が好き・やや好き」と思っている生徒が4割を切ったのに対し、そう思っていない生徒が6割を超えたそうです。

生徒ではなくても、現実的に考えるのがそもそも人間の本性。以下のような声が聞こえてきそうです。

- ◆何百年も前に何があったとか、遠い昔の人が何を考えたとか、今の私たちのくらしに何の関係があるのだろうか。
- ◆スピーディに現代日本語を話し、また書くことが求められる正に情報化社会の中で、古いことばなど必要ないよ。

どうでしょう。こうした状況をよしとしないのが、受講される先生方のお立場でありましょう。この問題の打開策を、『宇治拾遺物語』や『今昔物語集』などの本文を教材化して考えていくことにしたいと思います。

## 選択領域（中学校・高等学校 英語科コース）

### コミュニケーション能力の育成を目指す

中・高等学校英語科において、英語による実践的コミュニケーション能力をどう育成するかを考えていく。1日目は、「英語を使用した授業へ向けて」においては、様々な学習者のレベルに応用可能かつ学習者の動機を向上させるような教授法やアクティビティを取り上げ、受講者に実際に体験していただくこととする。2日目の「英語指導に役立つ英語史」においては、歴史的観点から英語の「謎」を解明し、英語に対する生徒の興味を喚起できるような内容を扱う。3日目は、小学校における英語科の教科化に伴い、小中高の連携と、授業における発問の視点を取り上げる。また、授業の中で文法・文型をどのように指導したら、より実践的なコミュニケーションの育成につながるかを「英文法をめぐる諸問題」と題して取り上げる。

（※下記講座の内容及び講座名等は変更する場合があります。）

## 1 英語を使用した授業へ向けて

B E C C 講師 Kelly Rose & Renaud Davies

### 1. Student Motivation and the Importance of Reflection

“How can I make my lesson more enjoyable for my students?” This is a common question posed by teachers of all contents. In this portion participants will explore the principles of motivation and how to apply them in their classrooms. Participants will also engage in setting goals and reflection techniques throughout the seminar on topics of their own teaching experiences.

### 2. Diversifying Instruction for Different Learning Needs

In this portion, learning styles, multiple intelligences and active learning will be discussed. Participants will reflect and brainstorm ways to differentiate their classroom activities to meet their students' diverse needs. Participants will also engage in an activity to incorporate technology and critical thinking skills in classroom lessons.

### 3. Classroom Language & Team Teaching

Participants will learn and practice some strategies for speaking English in their classrooms as well as the importance of establishing routines with predictable expressions. Strategies for effective team-teaching along with its benefits will also be discussed.

#### 4. Classroom Atmosphere

This portion will discuss both the physical setup of a classroom and the importance of creating a positive atmosphere. Participants will reflect upon their own classrooms and brainstorm ways to make their learning spaces safer. Participants will also engage in an activity to incorporate technology and discussion skills in classroom lessons.

## 2 英語指導に役立つ英語史

教育学部 教授 小西 弘 信  
教育学部 准教授 上 利 学

本授業の目的は、生徒が英語を学習する際に「なぜだろう」と思うような言語現象を英語史の知見を活かして解説し、受講者に語学的な研究の価値を理解してもらった上で、授業で活用できるようにすることである。

例えば、大学の授業の中で、学生たちに基本的な語彙である *near* と *next* が比較級、最上級であったことを伝え、驚きや興味・関心を示すことが多い。また、英語が簡単に修得できる言語ではない要因として、*doubt* や *receipt* のような綴りと発音の不一致、*go-went-gone* のような動詞の活用の不規則性などが挙げられよう。しかし、こうした言語現象を英語史の観点から説明すると、学生は、歴史のプロセスの中で生じた変化や規則性を見いだすことにより、英語に対する理解や納得を少なからず得ているようである。本授業では、現代英語の観点からは説明できない言語現象を解説し、英語を生徒に教える際に活用できる情報を提供したい。

### 3 小・中・高の連携と発問の視点

教育学部 教授 石原義文

新学習指導要領では、小学校、中学校、高等学校と英語教育に、外国語で「何ができるか」という能力の育成が求められている。そのため CAN-DO 項目と活用場面が小学校から高等学校までの英語の到達目標として一貫して用いられており、系統的に並べられている。

各地域でも小中高等学校の交流が盛んになり、校種を越えて、授業参観をして研究協議を行ったりするなどの連携も多く見られるようになった。小中高の連携や学びの円滑な接続の重要性は論を待たないが、形だけではなく、真の連携や接続を進めるためには、異なる校種の指導計画を把握し、授業参観等を通して、児童生徒の思考や学習内容の系統性について考えていく必要があると思われる。

中高の先生方に、特に小学校での言語材料、言語活動を紹介し、小中校における一貫した発問の視点も考えながら、効果的な連携について議論を深めたい。

### 4 英文法をめぐる諸問題

教育学部 教授 笹原豊造

実践的コミュニケーション能力の育成に焦点が当てられ、中・高等学校の英語授業においても「文法」を前面に打ち出した授業科目が姿を消している。しかし、文法指導が必要でなくなった訳ではない。文法や文型の指導では、中学校や高等学校の指導において、どう指導したらよいか話題となる項目を中心に上げ、討議したい。

英文法をめぐる諸問題

- (1) 5 文型 他動詞・自動詞
- (2) いろいろな時制
- (3) 修飾 関係代名詞 知覚動詞
- (4) 情報構造 受身 SV00
- (5) 和訳と英語学
- (6) その他